

樋口一葉『にぎりえ』における性の二重規範

ダブル・スタンダード

遠藤 伸治

有元 伸子

はじめに

樋口一葉の『にぎりえ』をめぐっては、お力の「思ふ事」や「丸木橋を渡る」ことの意味、朝之助に過去を打ち明けたあとの両者の反応の評価、結末のお力と源七の死がいかなるものだったかの推測など、これまで実に多くの、さまざまな論が積み重ねられてきている。本論では、『にぎりえ』がジェンダーをどう描いているのかという視点から、これらの問題を見直してみたい。問題点を明確にするために、まず、『にぎりえ』という物語に登場する主要な人物とその行為を概括してみよう。

『にぎりえ』には、曖昧料理屋の酌婦お力と客の朝之助、お力のかつての馴染みで今は零落してしまっている源七、源七の女房お初が登場する。お力は外で「性を売る女」であり、お力に興味を抱いて通ってきていた朝之助は、お力の思いを聞いた後で菊の井に泊り、「性を買う男」になる。一方、零落した源七は、お力から避けられ、もはや「性を買う男」ではいられなくなる。ここには、お力をめぐる「性を買う男」の交代劇がある。しかし、その交代を受け入れることができな

ない源七は、「家にいる女」であつたお初に離縁を言い渡して「家」を追い出し、お力を道連れに、「男」として名譽の切腹をとげる。このように概括すると、「男」には性の自由を認める一方、「女」にのみ貞節を求める、いわゆる「性の二重規範」によつて成立する家父長制度（したがって、「性を売る女」の存在も必要とする）が女も男をもいかに疎外して行くかが、『にぎりえ』という物語を通して見えてこよう。明治二八年という早い時代にこのような男女の性の二重規範を描きえていることを、まずは素朴に評価しておきたい。その上で、本稿では、『にぎりえ』における「結婚」と男女のあり方を、ジェンダーの視点から探っていく。

一 「丸木橋」の二重性——お力の葛藤と分裂

お力が朝之助に「思ふ事」を打ち明ける第五章では、まず、別の二人の酌婦が思いを語る。一人は、「昨日も川田やが店でおちやつびいのお六めと悪戯（ふざけ）まわして」いるような「浮いた了簡」の「染物やの辰さん」に、「家でも拵（もて）へる仕賃（しちん）をしてお呉れ」と意見を言つても聞いてもらえないことを嘆く。彼女は、結婚して父母をひきとり、「彼の人の半纏（はんてん）をば洗濯（せんたく）して、股引（はかま）のほころびでも縫（ぬ）つて見たい」と夢見て

いるのだが、それがかなえられないのである。二人目は、「二人揃つて甲斐性のある親をば持つて居る」子供をうらやましがる。彼女は、

（夫）が「呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく」という状態で、酌婦になった我が身を憂い、息子の与太郎に対して申し訳がないと涙ぐむ。

これらの酌婦達は、（男）が働いて（家）を形成し、（女）は妻として家庭内の仕事をして（男）につくし、子供（あるいは親）と平和な暮らしをするといった、まさに常識的な家庭を持つことを理想として内面化している。しかし、（性を買う）客である（男）の方は、（妻）にするべき（女）を求めて、酌婦のところへ行くのではない。

菊の井にしろ、川田やにしろ、このような場所こそは男達の逃避する場所なのであり、したがって、酌婦達が所帯を持つとうと思ひ始めたとき、そのように思われている（男）Ⅱ「情夫」は、家父長としての役割と責任を引き受けようとはせず、彼女達の前から逃走していく。あるいは、すでに（夫）がある場合、（夫）が家父長の責任を果たさないがゆえに、彼女達は酌婦にならざるをえなかったのであって、結局、彼女達は、（男）が家父長の役割を果たさないことを嘆いているのである。

こうして酌婦たちの嘆き節を通じて、（性を売る女）と（性を買う男）との、相補的でありながらも背離する関係が示されたあと、お力に焦点が移されていく。「菊の井のお力」も、前出の二人の酌婦と同様に「さる子細あればこそ此処の流れに落こんで嘘のありたけ申談（じやうたん）に其日を送つて」いるのであり、薄情な酌婦としての姿を朋輩や客たちの前で演じている一方で、内面では「悲しき事恐ろしき事」がたま

り、それを悟られないように「我まん」を重ねていることが、語り手によって明かされる。

そしてお力は、酒席で「お名はさゝねど此坐の中に」と「普通の嬉しがらせ」を言つて「やんやくと喜ばれる」。「口奇麗な事はいひますとも此あたりの人に泥の中の蓮とやら、悪業（わるわざ）に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ」（六）とお力が語るように、お力も含めて酌婦達は（性）を商品化しているのではあるが、売買されるのは即物的な性だけではない。客の（男）達は、酌婦との恋（その多くが幻想であるにせよ）を楽しみながら、相手と（結婚）して家父長となることの責任を回避する代償としていくばくかの金銭を支払う。（男）達にとつて、酌婦に思われることは、金力やそれを得る社会的地位の証でもあり、彼らは、自分が酌婦の単なる「馴染（なじみ）」ではなく、本気で思われているたつた一人の（男）Ⅱ「情夫」であることを競うような、その場限りの恋愛遊戯を求めて菊の井などの店にやってくる。⁽¹⁾ 前述したように、それが遊戯を越えて、酌婦達が所帯を持つとうと真剣に思ひ始めると、相手の男は多くの場合逃げ出してしまふのだが、お力は、それを「女夫（めよ）やくそくなどと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし」（二）と見破っている。彼女は、単に容姿に優れているだけでなく、そのような（男）達の期待を熟知し、それに応えられる点で有能な酌婦なのである。⁽²⁾

ところが、「我恋は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけ」たところで、お力は、客や朋輩たちを残して、突然座敷を飛び出してしまふ。そして、「行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、（略）つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情けない

悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ／＼と胸にたまつていた「悲しき事恐ろしき事」をあふれさせていると、「渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし声を其まゝ何処ともなく響いて来る」。

つまり、「丸木橋」の唄をきつかけとして、いつもの酌婦として有能な自分と普段は押し隠しているもう一人の自分というお力の自己分裂が決定的なまでに広がってしまうのだ。もう一人のお力は、酌婦としての自身を激しく嫌悪・否定し、その自己嫌悪の感情は、自分の属している世界全体の否定、現実そのものからの脱出・逃避の願望にまで高まる。「人情しらず義理しらず」の酌婦としての「菊の井のお力」を演じながらも、お力は、「人並み」の義理や人情といった社会的言説を実に強く内面化しており、その分裂・葛藤は、自分が唄っているはずであった「丸木橋」の唄の幻聴がするほどに彼女を追ひ詰めていく。

そして、幻聴の「丸木橋」の唄は、「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへて落てお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう」と、お力を父や祖父という〈男〉への自己同一化に向かわせる。お力は、〈女〉としての魅力を多分に持ち、酌婦としても有能なのだが、だからこそ、自分が〈女〉であること自体を否定し、まったく別の「一生」（＝今現に存在する自分とは完全に異なつた自分自身）を切望する。お力は、酌婦としての自己嫌悪・自己否定の果てに、〈女〉としてのアイデンティティまで否定し、父や祖父という〈男〉への自己同一化の幻想を

抱くのだ。

そして、自分がこのような苦しい思いを抱いて日々を生き抜いていることは、誰にも理解も同情もされず、やがて自分は「丸木橋」を渡りきれないまま「踏かへして落て」しまうだろうが、〈男〉である父や祖父も同じであつたのだという思いが、「為る丈の事はなければ死んでも死なれぬ」という絶望的な勇気をお力に与える。彼女には、自分がこのような分裂・葛藤状態から抜け出せることなどありえないと感じられており、たとえ幻想の中においてさえ、救済の場へは到達不可能である。こうしてお力は、父や祖父と同様に「踏かへして落て」しまう所までは「丸木橋」を渡り続けるしかないという覚悟を決める。どうせ「人並みでは無い」のだから「菊の井のお力を通してゆかう」、あとは「何うなりとも勝手になれ」という開き直りにも似た形で、分裂した自己を繋ぎとめ（矛盾と葛藤を抱え込み、不安定な自分ではあるが）、現実を回復しようとするのである。

二 お力と朝之助——「出世」をめぐる性の二重規範

この後、それでも容易に自分を取り戻せないでいたお力は、突然朝之助に肩をたたかれて驚く。この時のお力の目には、「常には左のみに心も留まらざりし結城の風采ふうさいの今宵は何となく尋常ふつじょうならず思はれて、「うつとり」と朝之助の顔を見つめる（六）。座敷を飛び出してからのお力は、完全に自分自身のことだけを考へており、残してきた客や朋輩のことはもちろん、朝之助のことも源七のことも、自分以外の者についてはまったく念頭にないまま、自らの女性性を否定するほどの自己嫌悪の中にいたのであつた。が、まさにその時、朝之助という異

性の他者との身体的な接触によって、〈女〉としての自己が葛藤や分裂をはさまない本来的な形で現れてきたのである。こうして、お力は朝之助にこれまで語ることを先延ばしにしていた「思ふ事」を打ち明け始める。

それでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧ろ九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが私は出来ませぬ、夫れかと言つて来るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛い、いとしいの、見初ましたのと出鱈目のお世辞をも言はねばならず、数の中には真にうけて此様な厄種やくぐさを女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ、そもぐの最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは嫌なり他処ながらは慕はし、一ト口に言はれたら浮気者でござんせう、あゝ此様な浮気者には誰れがしたと思召、三代伝はつての出来そこね、親父が一生もかなしい事でござんしたとてほろりとするに(六)

「世間さま並の事」を思つて「身を固めよう」と考へる事もあるが、それが自分にはできない。求婚してくる者もいるが、「持たれたら嬉しいか、添うたら本望か」それが自分には分らない。——ここに吐露されているのは、〈結婚〉に対する強い疑念であり、〈男〉に所有されることへの拒絶の念である。お力とて、〈女〉は〈結婚〉して幸福になるのだという世間一般の社会的言説を内面化していないわけではなく、また〈男〉から言い寄られれば嫌な氣もしない。一般の〈女〉

以上に〈女〉としての愛想や媚びを売る酌婦という商売でもある。しかし、それ以上にお力は、〈男〉に所有されたくないという自立志向が強い。だから、お力にとつて朝之助は、「一日お目にかゝらねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは嫌なり他処ながらは慕はし」という、〈結婚〉を前提としない恋の相手なのだ。ここには、〈結婚〉制度や〈夫〉と〈妻〉の役割といったジェンダーを排除したところで異性と結びつきたいという、お力のセクシュアリティが現れている。(その対象として朝之助を捉えたからこそ、お力はこの夜朝之助を泊らせる)。

そして、このような、〈結婚〉という制度から逸脱するセクシュアリティの発露という点では、お力に逢いに「一週には三度」(三)も菊の井に通つて来ながら求婚するわけでもない、朝之助の方も同様である。さらに、酌婦の一人が語つた「浮いた了簡」の「染物やの辰さん」(五)や、お高が「私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない」(一)と語つたような、恋と性とを楽しみながらも、相手と〈結婚〉して家父長となることの役割と責任からは逃避する〈男〉たちのあり方と同様である。

〈結婚〉を前提とせず、後の結婚生活に対する打算を含まないからこそ、客と酌婦という立場の違いや所属階級の差を越えて、純粹な恋は成立する。お力は、〈結婚〉とその後の性役割に縛られずに自由に異性とかかわりあおうとする意識において、「情夫」との結婚を夢見る他の酌婦達よりも、また、先回りして言えば、〈家〉にいてセクシュアリティから疎外されている源七の〈妻〉お初よりも、〈男〉たちの側に近い。

しかし、それにもかかわらず、お力は、やはり「世間さま並の」規範意識に従って、〈男〉である朝之助を「貴君は立派なお方様」と呼ぶのに対し、〈女〉である自分自身のことは「浮気者」・「出来そこね」と呼ばざるを得ない。〈結婚〉を前提としない恋愛関係が、〈男〉にとつては、やがて「出世」して妻を迎え家父長となるまでの執行猶予期間、あるいは、すでに「出世」して立派に家父長としての役割を果たした上での〈男〉としての力の余剰だと見なされるのに対し、〈女〉にとつては、「浮気者」・娼婦性を持つ「厄種」・「出来そこね」の徴とされるのである。ここにあるのは、所属階級の相違以上に、〈男〉と〈女〉に対する社会的な性差の言説であり、性に関する二重規範である。そしてお力は、自分がそのような「浮気者」と呼ばねばならないものになった原因を「三代伝はつての出来そこね」という祖父と父との物語として語ることによって、ここで再び自らを父―祖父の系譜の上に重ねていく。

お力は、祖父について、「十六の年から思ふ事があつて」「一念に修業して」、「世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて断食して死んださう」だと語り、飾職人の父は、「細工は誠に名人と言ふても宜い人」だったにもかかわらず、「気位たかくて人愛のなければ最負^{ひいふ}にしてくれる人もなく」、「何にもなる事は出来ない」ままに終わったと語る。そして、自身も七歳の年の冬、お使いの帰りに氷に滑つて、なけなしの米を「溝泥」の中に落とすという体験をし、「私は其頃から気が狂つたのでござんす」と回想する(六)。

祖父―父―七歳のお力。これら三つの物語は、自分の願望と現実と

の間の乖離から生じる挫折感と不条理感、周囲から同情も理解も得られない強い孤立感と疎外感といった感情によつて、〈男〉と〈女〉という性差を越えて通い合い、重なり合おうとする。しかるべき家に生まれなければ、〈男〉も〈女〉も同じなのだ。そして、その通い合い、重なり合う感情は、現在のお力が日々感じ続けながら押し隠し、「丸木橋」の唄を唄いかけたとき溢れ出してきたものでもある。朝之助に肩をたたかれて我にかえり、彼に〈男〉としての魅力を感じ、純粹な恋の相手として捉えたお力が、このとき朝之助に期待したのは、自分のそのような「情ない悲しい心細い」思いを彼が理解してくれ、そのようなところに「止められて居る」自分の「一生」に同情を示し、抱きしめてくれることであつたらう。

しかし、これに対し朝之助は、「お前は出世を望むな」と「突然^{とつぜん}に」言う。〈男〉である朝之助の解釈によれば、お力の物語は、志をもち才能もあり、努力もしたにもかかわらず、しかるべき〈家〉に生まれなかったために世に認められることなく挫折していった〈男〉の物語である。そして、「出世」し社会的に認められたいという〈男〉の欲望とそれが充足されないことに対する〈男〉の怨恨とに、お力は「我身の上にも知られます」と自分の姿を重ねようとしたと解釈される。朝之助の実像は不明であるが、酌婦たちの「今にあの方は出世をなさるに相違ない」(三)という評から、彼が「出世」前の身であることは確かであろう。やがて「出世」する(しなければならぬ)ことこそは、周囲の人々が朝之助を見る眼差しなのであり、「出世を望む」とは、そのような眼差しを内面化した朝之助自身の欲望にほかならないのではないか。朝之助は、彼自身の〈男〉としての自らの欲望をお

力の中に投影することによって、さまざまな思いの絡みあったお力の物語の中から、〈男〉と同様に「出世」したいという欲望を見いだすのである。

この朝之助の言葉に対して、お力は、「多ッ」と驚いて「私等が身にて望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬ」と答える。〈女〉であるお力にとつて、「出世」とは、身分ある〈男〉との〈結婚〉であり、「輿様」になることしかありえない。所属階級から上昇しようとする願望という点では同じであつても、社会的地位と評価を獲得していく〈男〉にとつてのいわゆる「立身出世」と、〈女〉にとつての「出世」である「玉の輿」、まして酌婦の「玉の輿」との間には、容易に超えられない差異がある。⁽⁴⁾

お力の祖父や父は、自分自身の考えや才能を自分自身の行為や仕事を通じて表現し、その行為や仕事によつて社会的に評価されようとして（まさに「出世」しようとして）したのであり、困難な状況の中で結局は成功しなかったにせよ、誇り高く、どこまでもその生を貫き通した。しかし、〈女〉であり、酌婦であるお力には、そのような生き方はありえない。

前述したように、お力は有能な酌婦である。臨機応変の人間関係の読み取りや客あしらいのうまさもち、「あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた」、「抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜い」、「菊の井のお力か、お力の菊の井か」（一）とまで評判をとるほどであつた。版をお上から止められるといった状況を読み取れなかつた祖父や、

「人愛のなければ最負にしてくれる人」もなかつた父親を、一面では乗り越えているとも言えないことはない。だが、それらは、あくまで

酌婦に対する評価でしかなくて、お力の望む評価ではない。彼女がおかれているのは、一般社会から「白鬼」（五）と忌避される酌婦の立場あり、〈男〉には性の自由を認めても、〈女〉には貞節を求める性の二重規範のもとにあるかぎり、社会から蔑まれ続ける。現にお力自身、仕事の最中に「つまらぬ、くだらぬ、面白くない」と感じ、「唐天竺の果までも」逃げ出したくなつたのだ。

また、仮に「玉の輿」に乗つて〈結婚〉したとしても、確かに酌婦という職業意識からは逃れられようが、〈男〉のように、自分の考えや才能を自身の行為や仕事を通じて表現し、社会的に評価される道が開けるわけではない。それどころか、〈男〉に「持たれ」、「添う」だけの存在になつてしまふ。酌婦の一人は、「悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく」と嘆息していた（五）。「彼の人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫」うといった〈家にいる女〉の幸福の裏にある惨めさを、お力は知悉していたであろう。そして、お力が回想する母も、帰りの遅い娘を案じて迎えには出るが、溜息をつくこと以外どうすることもできなかった。⁽⁵⁾

いつかは世間から評価され、「出世」するかもしれないという希望。たとえ「出世」する日がこないとしても節を曲げず、貫き通す誇り。

——そのようなものすら、父や祖父のような〈男〉にはありえても、家父長制度下の〈女〉であるかぎり、お力には持つことはできない。可能性は閉ざされており、そうした閉塞感が、頭痛となり、物思ひとなり、「行かよふ人の顔小さくく擦れ違ふ人の顔さへも遥とほくに見るやう思はれて」というように、狂気の一歩手前のような状態にまでお力を追い詰めたのである。⁽⁶⁾

お力の「思ふ事」を聞いて、「出世」という言葉をもち出す朝之助は、〈男〉の文脈によって彼女の物語を解釈し、彼女の〈男〉への同一化の願望を見抜いた。そして、その願望が現実の形をとりえないもの・存在しえないものであることを、結果的にお力の前に突きつけ、〈男〉である自分と〈女〉であるお力との間に横たわる越境しがたい社会的性差（それはお力自身の中に内面化された深い分裂でもある）をあらわにしてしまう。朝之助自身は、「思ひ切つてやれく」という台詞に示されるように、自分の言葉のもつ意味に十分には気がつかない。しかし、お力は「打しほれて又もの言はず」という状態となり、その夜、初めて朝之助を泊らせる。

朝之助への身上告白は、今まで「思ふ事」を誰にも言えずに抱え込んでいた重圧感からお力を解放し、肉体的接触は彼女の女性としてのアイデンティティを回復させたであろう。しかし、お力の切望する、社会的評価に支えられる形で自己肯定感、朝之助によっては得られない。求めるものからは排除されており、許されるものを否定することでは自己主張することはできない。お力は「世間さま並」の生き方を否定しつつ、しかしどう生きてよいか見極めることもできず、思い悩みつづけるしかないのだ。朝之助を「情夫」にすることにによって、お力は、良い慰め手を得たとは言える。しかし、性の二重規範が変わらないかぎり、お力が本質的に癒されることはない。

三 お初——「添う」こと、「持たれる」ことの不幸

〈家にいる女〉であるお初は、没落した自分たち一家が地域共同体からも疎外されていることを気に病み、何とか「世間さま並」の家庭

生活に戻りたいと願う。もし仮に彼女自身の手によってそれが可能であるならば、彼女はそうしたかったであろう。しかし、家長制度下の〈女〉であるお初には、源七を励ますことしかできない。

氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もなうで、夫こそ路頭に迷はねば成りませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらへて囲うたら宜うござりましょう、（四）

これが、お初の源七への励ましである。もちろんお初とて、〈夫〉が愛人を「囲う」ことを心から望んでいるわけではないだろうし、この言葉は、落魄して憔悴しきっている源七を慰め、元気づけるためのカラ景気づけのようなものではあろう。だが、彼女は買春それ自体を否定しているのではない。一家を養うことを〈男〉に求め、その代償として〈男〉に婚姻外の性をも認めるのが、お初の生き方である。だからこそ、これまで源七は、貞淑な〈妻〉を持つ一方、お力の〈性を買う男〉であることを許されていたのだ。

つまり、源七・お初夫婦の関係は、家長制度下の性別役割分業と性の二重規範の中にどつぷりとつかつたものである。〈家〉を存続させるために、源七は、〈男〉として一定の地位のある仕事（「町内で少しは巾もあつた蒲団や」）によって一定の全金を家にもちかえることが要求され、その代償として、お初は、子供を産み育て、家事という不払いのシャドーワークを行う。この性別役割分業から逸脱する恋愛感情や性的な快楽は、〈男〉である源七の場合、酌婦のお力が担当するが、〈女〉であるお初の場合は抑圧されたままである。

心切かは知らねど十軒長屋の一軒は除け物、男は外出がちなればいさゝか心に懸るまじけれど女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうなる情なき思ひもするを、其れをば思はで我が情婦^{こひめ}の上ばかりを思ひつゞけ、無情き人の心の底が夫れほどまでに恋しいか、昼も夢に見て独言にいふ情なき、女房の事も子の事も忘れはてゝお力一人に命をも遣る心か、浅ましい口惜しい愁らしい人と思ふに中々言葉は出ずして恨みの露を目の中にふくみぬ。(七)

「女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく」、「其れをば思はで我が情婦の上ばかりを思ひつゞけ」、「女房の事も子の事も忘れはてゝお力一人に命をも遣る心か、浅ましい口惜しい愁らしい人」といったお初の嘆きには、一人の女性として自分のことも思ひやつてほしい、自分や子供を省みてほしいという、源七に対する激しい願望がこめられている。だが、こうした渴望の念をお初は口にすることはない。源七がメッセージとして読み取ってくれることを希って、ただ「恨みの露を目の中にふくみぬ」ばかりである。

お初は、自分を女性として愛しんでほしいという願ひ・源七の気持ちに独占しているお力への嫉妬・自分の苦境を察してくれない源七への腹立ちなどの数々の思いを率直に言うこととはばかり、内面に閉じ込める。その代わりにお初が源七に対して口にするのは、御先祖にも申し訳ないし、息子のためにも改心して《家》のために働いてほしいという、《妻》として、《母》としての言葉ばかりである。後に源七が「出てゆけ」と叫んだ時ですら、彼女は「家の為をおもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする」(七)と訴える。お初は、《家》のために

家父長の役割を果たしてほしいと懇願する形でしか、源七に対してメッセージを発することができないのだ。

ところで、このように《男》が責任を果たさないことを嘆き、口に出せない情念をおし隠し、割り当てられた性役割を演じているという点では、お初も前述の酌婦たちと同様である。にもかかわず、お初は、あくまで酌婦を「売物買物^{うりものかひもの}」(四)として、その表層から一面的に捉えようとする。《商売女》である酌婦たちが、周囲の目から隠し、内面に抱え込んでいるかもしれない葛藤を、お初は同じ《女》として思ひやることも、想像することもない。「二葉やのお角」の例をひいて、相手の男が監獄に入ろうが、当人は「平気なもの、おもしろ可笑しく世を渡る」というのが、酌婦に対するお初の見方である。

お初については、「貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の裕衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立たぬやうに小針のつぎ当、狭帯きりゝと締めて蟬表の内職」(四)と語られる。貧苦の中で身ぎれいにする余裕のないことの表出ではあるのだが、一方で、《性を売る》お力への対抗上、セクシュアリティを捨てて《妻》としての役割に生きようとしていることの記号ともいえる。夫に対しては、行水や夕食などに今の境遇で許される限り細かく気配りをするものの、自らの外見には構わない。つぎは当たつていても清潔な着物さえきりりと着ていれば、お歯黒や眉毛を調えることはしない。(その対極にあるのが、「洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸もと計の白粉も栄えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて」、「思ひ切つたる大形の裕衣に引かけ帯は黒縹子と何やらのまが

ひ物、緋の平ぐけが背の処に見えて」(二)というお力のモードである)。お初は、不特定多数を相手にして「性売る」ために美麗な外見をする「商売女」たちと違って、自分は一人の「夫」と結婚している「妻」であり、「地女」であり、むしろ美麗であつてはならないと自己を規制する。彼女は、自分と「商売女」との間の差異を明確化することでは、現在の自分、「妻」としての自分を支えることができるのだ。

このように内面の情を抑えに抑えていたお初だが、息子の太吉がお力にもらったカステラを持ち帰ったことをきつかけとして、抑えていた内面を噴出させる(七)。「汚い穢い此様な菓子、家へ置くのも腹がたつ」、「馬鹿野郎め」と、お力の菓子袋を裏の空地へ投げ捨てたのだ。このとき初めて、お初は、没落以来(あるいはそれ以前も)日々胸の奥にたまりにたまっていた怒りや悲しみを爆発させた。ふだんは押し隠していた本音や深層の思いがほとばしり出た、という意味では、このカステラ事件は、お力の「独白夢遊」の場面にも通じよう。だが、それに対して、源七が浴びせたのが、「何処へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎め」という罵声であつた。

係累のないお初は、悔しさを押し殺して「家」においてくれと夫に詫びるが、その願いもかなえられず、息子連れてあてもなく「家」を出されてしまう。自分が「性売る女」たちとは異なつた「妻」なのだということを支えに生きていた、その「妻」の座がいかに不安定なものであつたか。「迷ふて来る人を誰れかれなしに丸める」

(四)「商売女」たちとは違って、「妻」は「亭主」というただ一人の「男」にすべてを依拠している。そのただ一人の「男」に離れられ

てしまえば、もろくもなくなつてしまう砂上の楼閣のようなものだったのである。

お初には、酌婦も「結婚」によつて家庭婦人になり、その一方で経済的な理由から酌婦になる女性が存在するのであつて(源七によつて離縁され、追い出された後、お初自身がこのような可能性に身を置くことになる)、「家にいる女」と「性売る女」の間の境界などいつでも越境可能であることに気づくことはできなかった。源七の遊蕩による一家の没落を、お初は、「お前が阿房を尽してお力づらめに釣られたから起つた事」となじり、一方でお力を「あの姉さんは鬼ではないか、父さんを怠惰者にした鬼ではないか、(略)喰ひついても飽き足らぬ悪魔」だと罵倒する(七)。だが、源七が「性を買う男」であることを容認した自らの存在自体も、この落魄には一役かつていたはずなのだ。しかし、お初はそうした「妻」の位置づけには最後まで気づくことはできなかったのである。

おわりに——心中という幻想

夏の初めには、お力のことなど「男らしく」あきらめて、「家」のために元気を出して働いてほしいというお初のお励ましに対して、源七は、「お力など、名計もいつて呉れるな、いはれると以前の不出来しを考へ出してよく、顔があげられぬ、何の此身になつて今更何をおもふ物か」と答え(四)、それでも仕事に出ていた。しかし、自分に意見を言う「妻」に対して「顔があげられぬ」ものになつてしまったことへの源七の空虚感は強く、お初のお励ましも重荷に感じられ、力仕事をしてもらうに夕食もとれない¹⁰⁾。そして、盆に入ると、もはや仕事

にも出ず、「去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一処に蔵前へ参詣した」(七)というお力との楽しかった思い出を想起するのみになる。源七にとって、〈男〉として最も満足すべきことは、〈夫〉であり〈父〉であることではなく、新開一と評判をとるお力の「情夫」¹⁾として周囲から見られていたことなのだ。

酌婦と関係をもつことは、一家を養うことの代償として、〈妻〉に婚姻外の性を認めさせ、〈性を買う〉ことのできる金力の証である。さらに源七は、評判の酌婦から本気で思われているたった一人の男Ⅱ「情夫」として、〈性を買う男〉たちの中の勝利者であった。彼は、没落してしまった今も、この〈性を買う男たちの中の勝利者としての自分〉という、過去の幻想にすがり続ける。お初が、お力との差異を明確化することによってしか〈妻〉としての自分を支えられなかったように、源七は、お力の「情夫」であるという思いによってしか、〈男〉としての自分を支えられないのである。

したがって、これまで指摘されてきているように、カステラとともに太吉によつてもたらされた、お力が「何処のか伯父さんと一処に」「表通りの賑やかな処」を歩いていったという情報は、源七には大きな衝撃であった。お力に新たな「情夫」ができ、自分がお力の「情夫」としての地位を失ったであろうことを思い知らされたからである。²⁾さらに、お力を金のある〈男〉に〈性を売る〉〈商売女〉であると罵るお初の言葉は、源七にとって、単に口うるさいだけでなく、崩壊しつつある自己幻想を完全に打ち砕こうとする脅威に感じられたであろう。そこで、源七は、「子に向つて父親の讒訴をいふ女房氣質を誰れが教へた」とお初を罵り、「妻たる身の不貞腐れをいふて済むと思ふか、

土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の権がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何処へなりとも出てゆけ」と、その脅威を自分の前から消そうとする。³⁾

この源七の言動が皮肉に響くのは、これが零落する前も零落した今も変わらず、ほかならぬお初自身が源七に期待し続けた男性役割であったという点である。お初は、〈家〉も〈地位〉も〈女〉も手に入れるというかつての男性役割を再び演じるよう、源七を励まし続けてきた。そして、その破綻が決定的になるうとした時、源七は、まさにお初が要求し続け、彼自身が依拠し続けてきた男性役割を言いつのる。源七は、お力という一人の女性への執着と言うよりも、〈男らしい自分自身〉への固執と、それが完全に崩壊しそうになったことによつて爆発し、自らを幻想の中に投げ込んで行く。お初を完全に支配し、所有物として捨て去る。——このお初に対する言葉による社会的な暴力は、続いてお力に対して発動される身体的な暴力のまえぶれである。

このとき源七の心を占めていたのは、一緒に死ぬことによつて、自分がお力から真に思われている「情夫」であること——〈性を買う男〉の勝利者であること——を絶対的に証明しようとする〈心中〉という幻想である。源七は、自分がかつて所有していたと幻想していた〈女〉を殺し、「男は美事な切腹、(略)あれこそは死花、ゑらさうに見えなかつた」「出世」の道を、源七は時代錯誤的な犯罪をなすことによつて、自らのものにしたのである。

しかし、「添う」こと・「持たれる」ことを拒絶していたお力が、その幻想を共有することはありえない。二人にとって、その死はまっ

たく別々のものなのである。お力の死は、〈男〉である源七の立場から離れてお力の側から見れば、〈性を買うこと〉Ⅱ〈男らしさ〉から自由になれなかった源七という男が、それが破綻した時に暴発的に引き起こした〈殺人〉にほかならない。〈男〉と〈女〉へ要求される役割の差、お力が求めつつも越えることのできなかったジェンダーの境界。それが、これまで二人の死を〈心中〉という言葉で括りこんで理解させてきたのだった。¹⁾

このような、お力と源七との結末だけでなく、源七にかわってお力の「情夫」になる朝之助、源七の女房お初、そして無名の酌婦達と客達、これら『にぎりえ』に登場する人物達は、みな疎外された生を生きているのであり、彼らを疎外してたものは、〈女〉にのみ貞節を求める一方、〈男〉には性の自由を認める——したがって、〈性を売る女〉を必要とし、〈女〉は二分化されて互いに敵対させられる——家父長制度下の性の二重規範²⁾であった。明治二八年にこのような性の二重規範を描きえている『にぎりえ』は、あらためて評価に値する作品であると言えるが、現在もまだ、お力と源七の死を一方的に〈心中〉として読もうとするジェンダー的偏見に満ちた人々の意識が、〈男〉と〈女〉との性の二重規範を維持させつづけ、〈性を売る女〉、〈性を買う男〉、〈家にいる女〉のいずれもが幸福になれない世界を継続させているのかもしれない。

注

(1) 高田知波は、『にぎりえ』に、「〈営業〉の領域の客」である「馴染」と、「営業を離れた〈プライベート〉な領域」における

「情夫[※]」という対立項が埋め込まれていることを示している。

(2) 「声というメディア」『にぎりえ』論の前提のために」槌口一葉研究会『論集槌口一葉』一九九六年、おうふう

(3) 戸松泉は、「菊の井の中で他の酌婦からきわだったプロ意識を持つ」「腕のよい酌婦」だとお力を分析している(「『にぎりえ』論のために——描かれた酌婦・お力の映像」「相模国文」一八、一九九一年三月)。

(4) 滝藤満義は「彼女は女ながらも、祖父や父ら男たちの野心と怨念とを己れの心として生きて来てしまったのである」と指摘する。

(5) 「『にぎりえ』論」『横浜国大語研究』一二、一九九四年三月)菅聡子は、一葉作品に頻出する「出世」に、「男の出世」と「女のご出世」と二つの意味があることを指摘する。「男の出世」は「文字通り身を立て世にでること」であり、「女の出世は取りも直さず身を売ること」であり、一葉は〈物を書く女〉であったために、「出世」の語の二義的な性格を身をもって認識したのだと言う。(「一葉の〈わかれ道〉——御出世といふは女に限りて」『国語と国文学』一九九三年二月)

(6) お力をこのように解釈するとき、七歳の彼女が溝に落としてしまったものが「米」であったことは重要であろう。「米」の飯を炊く食事の支度こそは、社会・文化が〈女〉の役割だと規定する仕事の筆頭であり、お力は、女性役割から逸脱しようとする自分を、性役割のモデルである母親によって示された「米」を買うという仕事を果たせなかった事件によって象徴的に語っている、と解釈することもできるからだ。

(6) 滝藤満義(注3)は、「祖父にとつての漢学、父にとつての飾職に相当するものが彼女には見当たらず、「何を以て世に出たらしいのかわかっていない」ため、お力が「行きづまってしまふ」と述べる。浜本春江も、「一葉は、(略)女であるお力の理想を、お力の幸福になる道を何等具体的に示し得なかったのではないか」、「しかし、いずれにしても、嫌な、がまんならない現実がある。

その現実から脱出して理想へと向かうこと、これがお力が丸木橋を渡る事であった。この場合、理想が具体的にわからない以上、それは漠然としたものとならざるを得ない」と語る(「槌口一葉研究―『にぎりえ』を中心にして」『名古屋大学国語国文』二四、一九六九年七月)。

(7) 石丸晶子は、「『死』の世界を通過して魂を洗い浄められ、あまつさえ、父祖の霊の呪力からも身上告白という行為によって解放された彼女は、今や新しく、この『地上』に、生活社会の中に降り立ったのである。結城は彼女を『死』の世界から『生者たちの世界』へ奪還してくれた男であり、父祖の霊の呪力、その家霊の絆から彼女を解放してやった祭司であった」と述べる(「にぎりえ」槌口一葉「日常」と「家霊」の交錯する中で「三好行雄編『日本の近代小説I』一九八六年、東京大学出版会)。

(8) 売春とは買春にはかならないのであり、(性を買う男)がいるからこそ(性を売る女)が存在する。売春婦のみが断罪されて買う男は放置されていたことが、近年認識されるようになったのはフェミニズムの成果だと言える。また、主婦と売買春とが表裏一体の制度であることもしばしば指摘されてきた。

(9) 浜本春江(注6)は、「愛情などと言うことが問題にならない。そうした家庭そのものが、お力に夢中になる源七を生んでしまつたのだと言うことができるのではないか」と述べる。

(10) 亀井秀雄は、「彼女は、自分のかしこげな世話女房ぶりこそが本当の原因なのだと考えていない」とお初を責め、源七に共感する(「非行としての情死」『感性の変革』一九八三年、講談社)。ジェンダーによって『にぎりえ』を読みとこうとする狩野啓子も、「良妻賢母が場合によつてはいかに夫を追い詰めるか、妻として何の落度もないことが、逆に夫を救われなくする」と語る(「『にぎりえ』―引き裂かれた生の諸相」『近代文学論集』一五、一九八九年一月)。しかし、問題は、お初の良妻賢母ぶり自体にあるのではなく(仮にお初が悪妻であったとしても、おそらく源七は救われなかったであろう)、そのような形でしか愛情を表現できないようにお初を疎外し、また、そのような妻の日常的言動によって夫が追い詰められてしまうような、家父長制度というシステム自体にあると言うべきだろう。

(11) 金井景子は、源七にとつて、過去の思い出は「労働意欲が阻喪した折の避難所として繰り返し逃げ込む対象」だと捉えており(「『女』の来歴―『にぎりえ』論への視角」『媒』五、一九八八年一二月)、関礼子は、源七が「過去の充足的な時間へと退行」していると捉える(「記号論の視点―槌口一葉『にぎりえ』」『国文学』一九八九年七月号)。

(12) 高田知波(注1)は、太吉からの情報を受けた源七は、「『馴染』から『情夫』へ越境した男の存在を脳裏に浮かべてシヨック

を受けた」と指摘している。

(13) 関礼子(注11)は、「『氣に入らぬ奴を家には置かぬ』という言い分は強がりには違いないが、この時点から源七はお初にたいする劣勢を一挙に反転させ、『父親』『亭主の権』という、おそらく落魄前には持ちあわせていたであろう自己の自己たる関係性の網の目をつなぎはじめる」と述べる。

(14) 金井景子(注11)は、「無理にせよ合意にせよ『心中』という言葉に括り込まれ、心中の片われとしてお力が生涯を閉じることの意味」を考えるべきだとし、「『鋳型に入つた女』を嫌っていたにもかかわらず、落ちぶれた情人と心中する遊妓という伝統的な役回りをあてがわれ、道行きもなくあの世に送られること、『にぎりえ』の最も深いアイロニーがここにある」と喝破する。

そして、「心中」とはいっても「他殺↓自殺」によるものにはほかならないこと、また、源七が切腹したことを重視して、「そこには恋しい女とあの世で結ばれようとする心中者の面ざしは消え、死をもつて名誉回復をはかろうとする男の意地が透けて見えてくる」と論じている。

付記

本稿は、遠藤と有元が、草稿の交換と討論を繰り返すことによって作成したものであり、内容に関して両名が等分に責任を負う。

(えんどう しんじ)
(ありもと のぶこ)